柏崎に原発があるの？

柏崎市
山本千晶（中一）

えっ柏崎にも原発あるの？知らなかったよ。原発のことはね、よくわからないけど、お母さんたちがね、原発は安全じゃないと言ってるの。

巻に原発をつくるか反対か住民投票で決めようとしていることはお父さんもお母さんも反対派がんばれって言っているし、テレビでも見るから知ってたよ。反対の票が多かったんで、妹と二人でバンザイして喜んだ。だって原発って事故があると放射能が私たちのところにもくるんでしょう。放射能のことはヒロシマとかね、原子爆弾のことで少し知ってる。

原発のこと、学校でならわなかったよ。ならったのかなあ。忘れた。暁子（小五）ならった？ならわないよねえ。

原発って電気つくるんでしょ。電気は大事だけど、放射能の心配のないものでつくればいいと思うよ。

地球の未来を考える

柏崎市
土田美幸（中三）

原発については分からない事がたくさんあり、不安です。一番の疑問点は「原発は一度造ったら壊せないのか」という事です。私達が死んでからも、あの建物は永遠に立ち続けるのでしょうか。原発というと「何かを隠している」というイメージがあり、だからますます本当に安全なのか疑いたくなります。

私達は原発によって、豊かな暮らしをしています。原発を造るには、それなりの理由があると思います。造らない方が良いとは言い切れないし、どっちが良いかは、はっきり分かりません。ただ、「目先の便利さや効率の良さだけでなく、地球の未来を考えなければならない」という事を、私は言いたいのです。これから造る原発は、巻町のように住民投票の意思を尊重したり、要望を聞き入れたりしてほしいし、国民全体に対して省エネで補えないのか、原子力による発電を希望するのかなどを聞きながら進めてほしいです。

もうできている原発に関しては、絶対に安全に運営してほしいです。

考えたくない原発

柏崎市
木戸ゆかり（高三）

友だちと原発を話題にすることはまずありません。柏崎に原発をつくり始めたころは幼い私の耳にも原発のことは入ってきましたが、今は原発の存在など意識しない日常です。

巻原発のことはテレビで見ます。でも、ああ巻のことかという感じです。

改めて原発のことを考えろと言われれば、危険だと思うし、反対という気持ちがあると思うのですが、考えるのは面倒だし、考えたくありません。

電気を使って反対とは矛盾では

柏崎市
畠山秀樹（中三）

最近のニュースや新聞などで僕もよく知っている原発建設の問題。それについては、たくさんの意見が出されていますが、僕はそれには賛成の意見を持っています。

原発の建設に反対している人は、別にそれでもかまいません。しかし、その人たちだって電気を使っているでしょう。ましてこんな暑い日々が続く中、クーラーを使わないわけないでしょう。以上の二点など言いもせず、自分でも電気を使っているのに原発の建設を反対しているのは矛盾しています。

しかも、電気は自分一人が使わなければ全体の消費量が少なくなるわけではありません。だから、まず省エネの呼びかけをしなければならないのではないでしょうか。

これからの社会はコンピュータが今以上に活躍する情報化社会です。今よりももっと電気の需要がふえるはずです。だから、今以上に省エネに心がけることが必要です。それを達成したときに、やっと原発も建てなくてすむようになると思います。

原子力発電について僕が思うこと

柏崎市
渡辺翔太（中三）

僕は、原子力発電に対して、不満があるわけではありません。むしろ

少しは賛成の方です。なぜなら、僕には原子力発電がそんなに危ないとは思えません。発電所側もいざというときのための対策をきちんと考えているんだろうし、なにより日頃からそんなことが起こらないように日々努力しているはずです。それに、今の日本にはもっと電気が必要なんだと思います。

僕は科学が好きなので原子力などの分野がさらに発展してほしいと思っています。

僕たちの生活に欠かすことのできない電気。これを作り出す手段として、必ずしも原子力を使わなくてはいけないのかどうか、これは僕にはわかりません。

柏崎 原発について小学生にきいた

柏崎市
高野祐介（小四）

問　柏崎に原発があるのを知っていますか。
答　知っているけど柏崎のどこにあるのかわからない。
問　だれから原発のことを教わりましたか。
答　よくテレビの宣伝に出てくるので、お母さんに、原子力発電所って何？ってきいたら電気をつくっている会社だよって言った。
問　原発について、ほかにどんなことを知っていますか。
答　テレビや明かりがつけられるようにしている。
問　友だちどうしで原発のことを話したことがありますか。
答　ない。
問　副読本「わたしたちの柏崎市」で、原発のことを学習したことはありますか。
答　おぼえていない。
問　チェルノブイリって聞いたことある？
答　聞いたことはない。
問　これから原発をつくるのに賛成か反対か住民の投票で決めた町が新潟県にあることを知っている？
答　知らない。

柏崎市
小林菜穂美（小四）

問　柏崎に原発があるのを知っていますか。
答　はい。
問　だれから原発のことを教わりましたか。
答　友だちとそのお母さんと、車で近くを通ったとき、あれ（建て物の一部）が原発よって、教え

てくれた。お父さんがよく言っている原発ってあれかと思った。(四年生の四月ころ)

問　原発について、ほかにどんなことを知ってる?

答　高い塔に電気がチャカポカしていて、木がいっぱいある中に建て物のあたまが見えた。

問　友だちどうしで原発のことを話したことがありますか。

答　ない。

問　副読本「わたしたちの柏崎市」で、原発のことを学習したことはありますか。

答　一回もない。

問　チェルノブイリって聞いたことある?

答　わからない。

問　これから原発をつくるのに賛成か反対か住民の投票で決めた町が新潟県にあることを知っている?

答　六時ぐらいのニュースで、おばさんたちがよろこんで泣いているのを見た。でも、賛成なのか反対なのかよくわからない。

戦争を体験しなくとも

上越市　田中　朗（中三）

学校の遠足で名立町に行きました。"平和を守る"という大きな石碑が海岸にありました。あとで父に聞いたり、図書館で調べて機雷の爆発で六三名もの子どもたちが犠牲になった碑だと知りました。戦争が終わって四年もたった一九四九年の爆発です。

戦争とは、罪のない人たちにつぎつぎと苦しい思いをさせ、何人もの尊い命を奪ってしまうとても悲惨なものだと思いました。

ぼくの父は、上越地方の戦争の傷跡を記録したり、平和を守る活動に協力しています。ぼくは戦争の反省を今日まで伝えてきた人たちを尊敬します。その人たちのおかげでぼく達のような戦争を体験しなかった者も戦争を二度としたくないと思えるからです。

ですから、これからも戦争の恐ろしさ、悲惨さを語り継いでいかなければならないと思います。ぼくも父に続くつもりです。

ヒロシマ修学旅行

白根市　井上真純（高二）

原子力爆弾が投下されたときの様子を描いた映画や小説がたくさんあ

ります。私もそのうちのいくつかはみたことがありますが、どうしてもフィクションなのではないかという考え方しかできませんでした。が、直接被爆者の方から体験談を聞き、原爆資料やドームを見学して、やっと現実にあったのだと実感できました。

原爆は、たくさんの人々の命を奪いましたが、そのなかで生き残ることができた人々、つまり被爆者である人々も、その後原爆症などによって悩まされています。このような事実を知るには、被爆者の方から話を聞くのが一番ですが、そんな機会はめったにあるものではありません。修学旅行だから可能だったと思います。

人というのは、自分自身が体験したことでなければ、本当に信じることはできないものです。だからこそ自分の耳できき、目で確かめた今度の旅行は大切でした。

戦争や災害は自然の摂理か

新潟市　佐藤　綾（中三）

戦争が起こらなくたって自然災害は起こる。今回の阪神大震災のように規模の大きいものがこれから何度もあると思う。私は自然災害はある意味で戦争をしないことの代わりだと思う。ひどいかもしれないけど災害や戦争は人口を減らすために起こっているのではないか。それが自然の摂理なのではないかと思う。戦争など人の手によって人を亡くすことができないなら、自然によって人口を減らさなくてはいけないのではないか。だから日本は自然災害が多いのではないかと思う。

いま、人口増加が世界的に問題になってきている。このまま増えていくと食糧が足りなくなってしまうといっている。

たしか戦争で同じ人間同士殺しあうのは良くないと思うが、それが自然の摂理というなら仕方がないと思う。人間を作ったときに神様がそう決めていたのならそれに逆らうことはできない。〝ノアの方舟〟のような事がこれから起こるかもしれない。そんな時にどうやって生きていくかを学ぶことがこれからの人間の課題ではないかと思う。

我ら希望、ここに有り

新発田市　佐藤恒平（中三）

中学二年の時の担任の先生は、僕

達生徒に戦争の恐ろしさを教えて下さった。それは、若い世代の僕等にとって知っておかなくてはならない事である。しかし、そんな事はどうでもいいよ、と思っているのが今の若い人。ボスニア・ヘルツェゴビナで戦争をやっているが、全然気になってはいないと思う。先生の話も実は、進んで聞きたがる人はいなかった。しかし先生は、必死になって戦争の話をしてくれる。そこまでしてなぜ？僕等は何とも思っていないのに。たぶん、僕達は希望なんだろう。そんな過ちをくり返してはいけない、という希望という荷物を背負った若者なのだろう。

各地でくりひろげられている戦争。僕等と同じ若者も多く死んでいるのだろう。こんな状況をほっといていいのだろうか。一体、僕等に何ができるのだろうか。ただ一つだけ、僕等が伝え続けていくことで、ずーっとやすらかにすごせる「平和」をあげることができるのだろうと思う。

新潟に基地がなくて良かった

新潟市　鈴村由美（高一）

母に聞かれた、「沖縄の米軍基地についてどう思う？」と。

「新潟に基地がなくて良かった」と答えて、もし身近に基地があったら、自分達の生活がどんなふうになっていただろうかと考えました。

実際には見たことがないので、想像するしかありませんが、テレビなどで見ると金網ごしに大きな戦闘機がいくつも見えて、とても不気味な感じがします。

一九五一年に、日米安保条約が締結され、米占領軍は引き続き基地を沖縄に置いたと習いました。日本が戦争に敗けたので仕方がなかったのかも知れません。でも、五〇年をすぎても、まだ基地があるのはどうしてなのでしょうか。

昨年九月には、小学六年生の女子が米兵三人に暴行されました。その子は死ぬほど恐ろしかったに違いありません。悲惨です。基地さえなかったら、こんなことは起こらなかったのにと思います。

父達の植えた桜

小出町　風間孝之（学生）

私の父達は、還暦を記念して、資金を持ち寄り公園に一本の桜を植えた。そこは魚沼三山と町が一望でき

るいい場所である。

一九四五年八月十五日を今の中学一年で迎えた彼らは、申酉会と名付け、四月の第三土曜日午後にその桜の下に集まり、簡素な同期会を開いている。今春の会では父に急用ができて、私が迎えにいった。ちょうど解散して三々五々帰るところだった。自分の目を疑った。あまりに背の低い人々が多くいたからである。

父は一五九センチで、当時の平均身長よりもわずかに低い。父よりもさらに低く、体格も劣る人たちが同期の人たちに少なからずいたのに驚いた。

私は一七三センチ。父との差十四センチは、戦争中の食糧難にあると、父の言う意味がよくわかった。そして彼らの植えた桜が平和のうちに枝を拡げていくことを心から願った。

十七歳で死んだばあちゃんの娘

広神村　金子千佳（高二）

父には姉がいた。でも私は会ったことがない。敗戦後二年の一九四七年、十七歳でなくなったのだ。ばあちゃんは、八十九歳。少しぼけが見えるが、元気である。ばあちゃんは、自分の長女を十七歳で失った苦しみをつい昨日のように語る。決まり文句は次の通り。

「あの時毎日卵や牛乳を食べさせれば、助かったかもしれん」「戦争さえなければ、病気にしなくて良かった」「勉強が好きな子であった。長岡の女学校まで通わせたのに」

父は、祖父のあとをついで家業に励み、ばあちゃんを大事にしてきた。ばあちゃんのそのいつもの話にも、飽きもせず相槌を打っている。父にも想い出深い姉だったに違いないと、この頃わかってきた。戦争の恐ろしさも少しはわかってきた。

「第二次世界大戦」を読んで

新発田市　米倉絵美（小六）

子供達は学校で先生に戦争のことばかりを教えられ、軍人となって戦場へ行きたいという夢をもつようにまでなってしまったり、国民は「天皇の子」というふうに教えられ、天皇のために死んできて下さいとまで言われるようになっていった。戦争に反対すれば非国民と呼ばれ、負け

ていても勝っていると知らされる。こんなことまでしても勝ちたいのか。国を豊かにするにはもっと方法がないのか。天皇の一言で始まり、終わるという事がばかばかしくなる。もう二度としてほしくない。

「捕虜になるまで」を読んで

長岡市
小林ひかる（小六）

この本を読んでみて、改めて太平洋戦争では、沖縄県民が大きな被害を受けたと感じました。それは今も大きな影響となって国体でも〝きみがよ〟の歌をうたわない人がいて、国をうらんでいることがよくわかりました。靖国神社へいくためと、戦争教育のため、日本が勝つと教わり、自分の命も天皇にささげるとし、バンザーイと喜びの声をあげ戦場へ行った兵士。それは喜びでなく、さけびの声のようにも感じられる。

「どろまみれの戦線」を読んで

西蒲原郡
渡辺泰平（小六）

一頭二百円の馬だったので、兵よりも大事にしたり、少しの失敗で、全員をなぐったり、ほりょになる前に自決しろと教えたりした軍人たちはどうかしていると思う。

原爆を広島と長崎におとされる前にこうふくしていれば、ぎせい者が少なくなったはずである。こんな戦争をしたために、日本はいろんな人たちから、うらまれてしまった。

もうこんなことがおこらぬように世界の国々と仲よくし、戦争とはどういうものなのかを人々に知ってもらう必要がある。

見つけた「本当の部活動」

小出町
大山徳也（高二）

僕は高校に入りバスケ部になった。即レギュラーになるつもりでいたのに、監督は僕を試合に出さなかった。さらにバスケに対する意気込みが裏目に出て、チームメイト達とあまりうまくいかなかった。そのこととレギュラーとして使われない自分に対する羞恥心から、僕は一年の大会で部活に出なくなってしまい、そのまま二度と出ることはなかった。

絶望感、屈辱感、そういったものが頭の中を駆けめぐり、自己嫌悪に陥った。あとになって考えると、実際自分は自分が思っていたほどすごい実力の持ち主でも、才能の持ち主でもなかったのだが。

だがある人が、僕を助けてくれた。その人のお陰で僕は大切なことを気付かされた。それまで僕は自分の活躍だけを考え、試合に出ない自分を恥じていた。下らぬプライドの塊だった。他人を見れば常に自分より上手いか下手か、そんな目しか持っていなかった。だけどその人は、活躍することなどでなく、仲間とともにプレーすること自体を誇りに思う事の大切さを教えてくれた。

もちろんレギュラーになりたい、一番になりたいと思うことも大切だろう。けどそんな観点からしか物事を見れないような人間は、きっと僕のように絶望感に陥ってしまうだろう。

一番大切なのは、仲間がいての自分だ。そしてそれは部活そのものを意味する。

いま僕は、町のクラブチームのバスケに通っている。バスケが好きな奴らでチームを結成して活躍している。学校の部活は辞めてしまったけど、いまこのチームでその分をとり返したいと思っている。

部活とは単に勝ち負けではなく、仲間のために自分を犠牲にすることを学ぶ場だと思う。これは人間として最も大切なことかもしれない。

家族旅行で失ったレギュラーの座

長岡市　関屋大介（中二）

ぼくはフルートを吹く、P中学校ブラス・バンドの一員。今年は予想以上に地区大会で好成績をとり、県大会に出場が決まった。「バンザイ」ではなく「困ったな」がぼくの胸中。というのは、お盆前に家族で初めて海外へ行く予定だった。姉が再来年は大学入試だから、今年がベストと決めていた。

部活の顧問のS先生に話した。果たせるかな、「なんでもっと早く知らせなかったのか」とネチネチ。ぼくは「早く言ったら、レギュラーを外されるじゃないか」と心で怒っていた。帰宅して父に、ぼくは旅行に行かないで部活の練習に励むといった。父は、「五日間も独り、おいていくわけにはいかない」「部活は、これからいくらでもできる。家族旅行はこれが最後かも」とゆずらない。祖父母にもきいたが、家族を大事にせよといわれ、悩みつつ旅行を選んだ。祖父は、「練習を休むのだから、レギュラーはAさんに変わるのが当然。その覚悟をしておきなさい」と言った。

県大会ではぼくは裏方。ステージ脇からAさんの演奏を見つめながら、「あそこに座りたかったな」の気持ちを押さえるのに苦しんだ。

先生、教室の暴君をやめて
―給食のミカンのきずの思い出―

三条市　斎藤宣広（高二）

ぼくは、二年生だった。給食の「イタダキマース」直前のざわざわを上回る怒声が、おちてきた。担任のU先生からである。何が理由かは十年後の今もわからない。たぶんうるさ過ぎるということからと理解している。

U先生は、すでに配られているミカンを食卓のうえに集めるように命令した。僕は、何やら不当な感じがして、ミカンに爪で小さな傷を付けた。一種の抗議の気持ちだった。

少しして激怒した声が、僕をふるえあがらせた。「このミカンに穴をあけたのは、だれだ。前にでろ」と。

けっきょく、だれも名乗り出ず、「ミカンを独りずつ取りにこい」となった。僕は、おそらく真っ青の顔で行ったに違いない。その七歳の僕の姿はいまでも消えない。U先生のいやな記憶とともに。

看護婦になりたい

新潟市　鈴木佳奈（中三）

私は大きくなったら看護婦になりたいのです。いい看護婦になれるといいなと思っています。五、六年前からずっと憧れつづけてきたのが看護婦という職業です。

親と先生に、三者面談で自分は看護婦になりたいこと、高校は看護科にいきたいということを話しました。最初、先生は「普通科を受けたほうがいいよ」といわれたけど、迷わず「看護科にします」とはっきり言いました。そしたら先生も私の心をわかってくれました。

今、本当の自分を見つけられたように思います。自分がちゃんとここにいるという気がします。

憧れだった看護婦になりたい。夢だったのが夢でなくなる。

農薬飲んで死にたい

神林村　伊東真美（中二）

クラスでも「できる子」といわれている三人からいじめられ始めてから一年にもなります。「なんだその長い髪きってこい」、「ブス」、「おめえの白い肌見ると気持ち悪くなる」といわれ、「日舞、三味線など止めてしまえ」と脅かされ、三人の推薦で運動会の応援団長にかつぎだされたりしました。また、「明日の騎馬戦で蹴落としてやる」とまでいわれる中で、私はパラコートをのんで死のうと思いました。学校は何もしてくれませんでした。そんな頃、母が『やっぱり私は十二才』（「いじめ克服した母親の記録」：草土文化）を読んでいました。「私に先に読ませて」といって勉強もしないで読みました。家族の前でその中の「八〇〇メートル完走」を朗読しました。皆が拍手しました。

工業高校卒業できる

新潟市　田中雄介（高二）

病身の母と父違いの二人の弟の四人家族のなかで心配かけ、苦労させてきた母に卒業し就職して安心させてやりたいのだ。

高校合格のときは「ヤッター」と思い、すごいなにかがこみあげてきた。ところが勉強は難しい、特に数学はついていけない。でも一年の時は赤点はなかった。実習は面白く楽しかった。溶接と旋盤、鋳物などやっていると機械科に入って良かったと思う。汚いのが当然のような、女子生徒のいない学校、下駄箱、便所の戸はこわされ、出来る子、出来ない子の差別が席順にまでってくる。

二年生になり僕は授業妨害、教師への暴力で学校から「中退勧告」を受け、弁護士さんに相談して「中退勧告」取消しとなった。僕は高校を卒業できる。

福祉の大学に進みたい

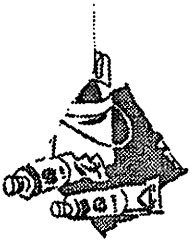
豊浦町　斉藤浩之（高三）

一人の兄が悪性のインフルエンザ

で亡くなった。優しかった高二の兄の死がきっかけで「いきたくないのに、いけない」気持ちで中一の夏休みからとうとう中三の十一月頃まで学校にいけなかった。友人との電話や遊びはつづけ、友人から学校生活のようすを聞き自学自習で過ごしてきた。

卒業したい、高校に行きたい、という気持ちはあった。いろいろな所へ相談した。県民教育研究所へもいった。おかげで中学卒業も出来た。予備校に通った。定時制高校を受験し合格。励まし、優しく協力してくれる職場に勤め定時制も卒業できる。

卒業を前にして、今度は福祉の大学に進学し学びたいと思っている。実現できるかどうか？



先生が助けてくれた わたしの登校拒否

新発田市　鈴木美樹（看護学生）

中学二年の夏休みが始まる直前でした。部活の太鼓の練習の仕方で、部の人たちとトラブってしまいました。親友だと思っていたA子にさえ、文句をいわれガックリきました。他人事だと思っていた登校拒否にかかりました。朝、玄関に立つとどうしても足が動かなくなるのです。腹まで痛くなります。

母は、兄ちゃんの経験もあったせいかわりに落ち着いていました。後で聞くと変になりそうだったが、担任の先生と協力できたのが救いだったということです。

担任は、背は低いが親しめる雰囲気でした。余りひいきをしないので人気がありました。二ヵ月の不登校のうち二回ほど家にきました。他に電話をちょいちょいくれました。いま思うとこれが力になったといえます。母と連絡しながら電話でつないでくれたのだと思います。感謝しています。

サザン・イリノイ 新潟校を出て

東京都（新潟市出身）　北村雄二（会社員）

ぼくは、中条の新潟校に一年半おり、アメリカの本校には約三年いた。三年は長すぎると、両親にはいわれたし、事実、ぼくも羽を伸ばして遊

て遊び過ぎたと思う。「お金頼む」の「SOS」をたびたび発した。でもそれにお釣がくる程のいい体験をしたと自負している。

地元で通えるし、受験勉強もいらず、推薦で入れるし、アメリカに行けるのが魅力だった。しかし大学卒の資格にならないのが、それほどネックになるとは予想以上だった。就職事情が厳しくなったせいもあるが、せっかく身につけた英語力がちっとも活かせない職につかざるをえなかった。地元で働き両親に少しは安心させたかったのに東京に住んでいる。「イリノイより近いじゃん」と強がりを言ってはいるが。

偏差値だけで言わないで

長岡市　上田紫穂（学生）

「あなたの実力で、受かるはずがない。変えなさい」が進路担当の先生の御託宣でした。「小学校の頃から教会の英語教室にも出てきたのだし、中・高と、今も英語に打ち込んでいる。受験日まではまだ日にちがある。絶対に合格してやろう」。これがわたしのその時の決意でした。「先生は、受験産業のデータだけしか見ていない。そのデータにはわたしのこれから伸びる分は入っていない。第一希望のICUをあきらめるなんて、いや」と、いっそう勉強に励みました。運もよかったのでしょう。現役で入りました。ただ、二年生までは受験勉強のときよりも必死に頑張らないと授業についていけなかったのも事実です。

いまは毎日が充実して幸せです。あの時の先生の指示に従っていたら今日がなかったといえるでしょう。

眼科医がお腹を触った

新潟市　長谷川実希（学生）

わたしは保育園の年長組でした。A先生の眼科検診がありました。わたしたちは、パンツ一枚の姿で静かに並ばされていました。

わたしの番になり、A先生はさっ

と両方のまぶたを返すようにして終わりました。その時です、パンツのなかにA先生の手が入ってきて、下腹部を撫でたのは。目の検査に関係があるのかなと思いましたが、すぐそんなはずがないと心で否定したのを覚えています。

このことは、友達にも両親にも長い間話しませんでした。大学で、児童虐待のことを学んで、この夏父に話しました。「夢を見たのじゃないだろうな」と、いわれました。決して夢ではなく本当です。

大人は、幼い子どもを何もわからない者なんて考えてはいけない。大人たちの心ない行為で傷つくことがあるんです。

ファミコン・カセットが欲しい

下田村　小林聡史（小五）

ぼくは、ファミコンのカセットが欲しいのに父も母も買ってくれない。そのカセットは友達がたいてい持っているのに。それがないと友達とあそべないからつらい。

父ちゃんなんか、仕事にあぶれたといって朝から家でぶらぶらしていたり、車に乗ってパチンコやに行ったりする。

母ちゃんに頼むと、おっかない顔をしていう、「もう金なんて無くなってしまったよ。サラ金だって貸さないよ」

ぼくは、何でもいいからファミコン・カセットを買ってと口のなかで言っている。

親がケンカをしないきまりを

南魚沼郡　内山　翔（小五）

「ビールなんか飲んでも、しょんべんになるんだから、やめな」と母ちゃんが言った。父ちゃんは、「なにを、タバコらって、煙になるばっからねか」と、怒鳴りかえした。

この頃毎日のように、父と母がケンカをする。「やめて」と、言いたいが恐くて言えない。ぼくはもううんざりだ。どうして仲良くできないのだろう。

ケンカする親は嫌いだ。ぼくが毎日びくびくしているのに、ちっともわかっていない。親が、ケンカをしてはならないという決まりができるといいなと、ぼくは思う。

国公立大学へ行けるから県立国際情報高校はいい

斎藤伸江（高一）

県立国際情報高校は、上越新幹線も停まる浦佐駅の東側にあります。寮生、通学生とも、勉強漬けの毎日です。大学入試問題集からピックアップしたような課題が、毎日出ます。それらをこなしていくだけでも、私はやっとです。

この夏休みは家にいたのは二週間だけ、後は学校へ補習授業に通いました。でも、これらを真面目になっていけば国公立大学へいけると、聞いています。

まだ二回しか先輩卒業生は出ていませんが、国公立大学へ多数いっています。私もその後を追っていくつもりです。

私のいっている塾

山田卓也（小六）

私は、今日の調査には手をあげるのに困った。先生は、「勉強の塾へ行っているもの」といわれたけれども、私の行っている塾は勉強もするし、遊びもやる。絵もかくし、作文もかく。

だから手をあげなかった。だってテレビなんかでみる東京の勉強の塾とはまるで違うと思ったから。

塾の先生は、坊さんです。葬式や法事がある日は、休みになったり日延べします。

私は、いまの塾が好きです。放課後はなるべく早く行きます。本堂の裏のくさむらなどにいる虫を見るのも好きです。

私の伯父の戦争体験

白根市
大田明美（小六）

伯父さんは、もう定年で家にいます。宿題の「家の人の戦争体験を聞く」を頼んだら、話してくれました。

「昭和二十年に旧制中学一年になったが、勉強はほどんどしないで、毎日新発田から菅谷まで（約六キロメートル）歩いていっては炭焼きや伐採、開墾と仕事をさせられた。

かんさい機（艦載機）の来襲があって、避難した記憶もあるし、B29がゆうゆうと、高いところを飛んでいる姿を見た記憶もある。

中学校の体育館に工場が疎開してきていた。グランドも畑になった。

八月十五日の終戦の詔書は、開墾先の区長宅の庭で、頭を下げて聞いたのは、よく覚えている。暑い暑い日だった。」